

とうじゅいん  
洞寿院境内の水難の碑

洞寿院境内には、明治28年7月29日の出水の際に滋賀県より派遣され、濁流に流されて殉職した森本兵二郎警部の碑があります（写真1～2）。



写真1 森本警部水難の碑



写真2 石碑近景と石碑の場所

伊香郡長、木之本警察署長、丹生村長、他有志によって、明治31年8月に建立された石碑には次のように記されています。

明治二十八年七月下旬霖雨二十九日江北所川氾濫伊香郡高時川最急水加丈餘  
山壑崩家屋流禾偃木拔橋斷梁壞 丹生村北里往来不通災害不測  
人人憂之蓋前代未聞洪水也 県派僚属救援森本警部亦與焉君首聞  
丹生村慘状憂慮不能禁則拉吏胥直赴援徑路皆絶 屢冒危難行慰撫諸里漸達  
於丹生村驚見于時里中 土砂堆積民家概埋没乃督役夫救護甚力  
越八月二日又衝雨登山隔川望 尾羽梨針川急扼攀險越崖涉上流達  
彼岸救護頗勉難民依 安歸途乱流乃中濁浪轉石蹶而溺  
同行者倉皇援乃遂不乃悲哉聞者無不矚君斃其職又嗟其死非命不矣  
村民思而不措欲建石伝 君功績於不朽使予記其概君名兵二郎  
森本其氏徳島県土族也  
明治二十九年三月 滋賀県伊香西浅井郡長従七位遠藤宗義撰並書

改行の位置等は実際のものとは異なります  
余呉町誌を基に実際の碑文より修正しています

### 【読み方】

明治二十八年七月下旬霖雨あり、二十九日湖北の諸川氾濫せり。伊香郡高時川最も急し。水加はること丈余り、山壑崩れ、家屋流れ、禾偃し、木抜け、橋断え、梁壊る。丹生村の北里は往来通ぜず、災害測れず、人々之を憂ふ。蓋し前代未聞の洪水なり。県僚属を派して救援し、森本警部も亦焉に与る。君首めて丹生村の惨状を聞き、憂慮禁ずる能はず。則ち吏胥を拉して直ちに援に赴く。経路皆絶え、屢ば危を冒して難行し、諸里を慰撫して、漸く丹生村驚見に達す。時に里中の土砂堆積し、民家概ね埋没す。乃ち役夫を督し、救護甚だ力む。越して八月二日、又雨を衝きて山に登り、川を隔てて尾羽梨針川を望み、急ぎて扼して険を攀じ、崖を越え、上流を涉り、彼の岸に達して、救護頗る勉め、難民依りて安し。帰路乱流中流に及び、濁浪石を転し、石に蹶きて溺る。同行者倉皇として之を援くるも、遂に及ばず。悲しいかな、聞く者君の其の職に斃れたるを矚とせざる無し。又嗟其の死は悲命なりや不や。村民思ひて惜かず、石を建てて君の功績を不朽に伝へんと欲し、予をして其の概を記せしむ。君、名は兵二郎、森本は其の氏、徳島県土族なり。

明治二十九年九月三日

滋賀県伊香西浅井郡長従七位遠藤宗義撰し、並びに書す

## 【現代語訳】

明治28年の7月は長雨が続き、29日には湖北の諸川で氾濫が発生した。高時川上流の丹生の村々では、最も被害が激しかった。山は崩れ、家は流され、稲も倒れ、橋梁も壊れて往来もできず、丹生村北部は孤立し、人々は不安にさいなまれた。県は森本警部らを急遽、現地に派遣した。警部は惨状を聞き、早く人を救いたいと思い、急いで部下を率いて救援に向かった。途路は災害のため寸断されていて、幾度も危険を冒しながら進み、途中の村々を慰め安心させながら、ようやく鷺見村にたどり着いた。あたりは、村中に土砂が流れ込み、民家のほとんどは埋没していた。警部は部下や作業員を指揮し、救援活動に尽力した。8月2日、警部は降り続く雨の中、勇気をふりしぼって出発し、険しい崖をこえ、濁流の川を渡るなど困難をこえて奥へ進んだ。尾羽梨村、針川村に至り、献身的に救護活動にあたって、村民たちは安らぎを得た。その帰路、警部は増水した川で流れてくる石につまずいて溺れ、同行者の必死の救助もかなわず逝去された。この死を聞く者は、警部の勇氣ある行動に感謝し、その殉職に心を痛めない者はいない。ああ、その死は、非業の死なのかそうでないのか...村民は森本警部を思慕し続けて石碑を建て、彼の功績を後世まで伝えたいと願った。私がその概要を記した。君の名は兵二郎、森本はその氏である。徳島県の土族である。

本資料の翻訳等にあたっては、高月町立観音の里歴史民俗資料館 佐々木悦也 学芸員、大谷大学文学部 水田紀久 講師の協力を得ております。ここに感謝の意を表します。

また、平成16年1月19日(月)に丹生ダム建設所内で行われた、谷口長三氏(余呉町鷺見出身、大正14年生まれ)の『奥丹生の風土と暮らし』と題した講演会で、森本警部に関する話がなされています。関連する部分を以下に抜粋して、紹介します。

...木之本警察署から現地視察に来た森本警部という人が、尾羽梨と鷺見の境に架かっている、古呂立という地名の所ですけど、そこに高時川に橋が架かっている、その橋を渡っていかないと尾羽梨の方に行けないので渡っている時に、橋にザブザブと水が掛かっておったそうです。それを無理に渡ったがために流されて、濁水の中に流されてしまった。

複数でいたので、どういう方法で助けたのか知りませんが、とにかく300m程下った所に大きな淵があって、その淵で引っ張り上げたそうです。相当な川であつたらうから、よっぽど条件が合わないとな濁流の中に飛び込んで引っ張り上げるというようなことはできないから、岸へうまく寄ってきたんだと想像するんですけど、その警部を引き上げたそうです。

それで、鷺見では、その淵を「警部の淵」と呼んでいます。今でもありますけれども。その警部の遭難の碑というのが、今、洞寿院の山門を入った所に建っております。現場にも、私らの子供の頃には(碑が)あったわけなんですけれども、それを探したんですけど、どうしてもわからなんだ。そういういきさつがあります。...